

「AI」に関する卒業生の講演会を行いました。

高校2年生では、6月21日（金）の4・5時間目に、本校卒業生による講演会を行いました。本校の卒業生である坪井一菜さんは、慶應義塾大学理工学部進学後、同大学大学院を修了し、現在はマイクロソフト社に勤務、入社直後から女子高生AI「りんな」の企画、開発に携わっています。

高校2年生は本格的な進路選択の時期に来ており、講演会では坪井さんが幼い頃好きだったゲームのお話、洗足での中高時代にはホームページ作りに熱中したこと、慶應義塾大学を選んだきっかけ、就職先を決める時に考えたことなど、幼少期から現在に至るまでの様々なことをお話していただき、高校2年生一人一人にとって、進路を考える上で大変参考になる内容でした。

AIと聞くと、「人間の仕事を奪う」「人間の制御が効かなくなる」等、否定的なイメージを持たれることもあります。坪井さんは「りんな」を開発するにあたって、人と人とのコミュニケーションをサポートするような存在であって欲しい、という思いを込めたそうです。「りんな」は今ではLINEで電話をしたりすることもでき、CDデビューも果たしているそうです。

講演の後、第2部では、パネルディスカッションを行いました。生徒達からは「りんなの言葉は膨大な会話データをもとに構成されているようですが、一般市民の会話を元にする、りんなの会話には新奇性やカリスマ性は生まれないのではないのですか」、あるいは「『共感』という言葉には普遍性があるので、りんなを世界進出させることは考えていますか」といった鋭い質問もありました。

生徒の感想文を紹介します。

「AIは近年身近なところに多く存在している。AIは機械であり、世界の様々な情報を持っており、その情報を処理して学習している。しかし世界の情報を処理して学習する時、「この時、この場合はこの言葉」などと多数のパターンの中から使用頻度の高いものを取り入れる。そのため、少数派の意見が反映されにくいかもしれない。機械＝正確という感覚があるが、AIからの情報は本当に正しいのか、AIを信じすぎず、取舍選択をすることを忘れないようにすることが必要だと思う。」

「AIは現在、絵を描く、歌をつくる、詞を書くなどの”感性”だけから創り出すということはできず、今までにあったもの・ことから学習して創り上げることしかできない。しかし人間の芸術も”感性”だけというより今までの自身の経験から創り出されるものであり、芸術はAIにはできない人間的な分野とは一概に言えないのだと思った。」

